

都市東京に対しほぼ同じ条件下にあるとみられる北関東都市の基準値との比較を行ない、両市の性格の類似点、相異点を求めた。また両市の性格的把握の一端として通勤圏及び中学生の家庭を対象とするアンケート調査による商圈を利用した。

両市に共通する性格

1) 両市とも古くから発達し、巨大都市の拡大による急激な人口増加は受けず、人口増加速度は概して緩慢である。2) 北関東は在来工業である繊維、木工、食品工業を基幹として展開し高崎では車需産業も発展したが、昭和30年以後京浜工業地帯の拡大により、耐久消費財生産の機械工業や原料指向の食料品工業の進出が著しい。

両市で異なる性格

1) 商業機能は販売額では前橋が高いが、店舗及び従業者当り販売額、商圈では高崎が前橋を大きく上回っている。店舗及び従業者当り販売額の差は主としてデパートによるものである。高崎では交通機関と直結した商店街が形成されている。2) 前橋に卓越する行政機能と高崎に卓越する運輸通信機能は、他方の都市では著しく低い対照的な機能であり、各々が両市の代表的機能であることから両市の基盤とする機能は相異なる。3) 両市の基盤とする機能に附随して前橋のサービス業、金融保険業、不動産業の卓越にも著しいものがみられ、高崎との差は大きい。これらは公務と同様の傾向を示し、行政機能と密接な関係にある。4) 商圈及び通勤通学圏は両市で異なった方向へ伸び複合することなく両市を中心とする交通路線に沿って形成されている。以上の点から両市は概括的には類似的性格を示すが、その内部ではかなり異なる性格を示し、対照的性格を示すものとみられ、両市の競合関係は薄いと考えられる。これらから性格の異なる都市がいかに隣接していようとも、両者は競合することなく発展するのではないかということが推察される。さらに両市と同様な関係にあると考えられる各地の双生児的都市の研究を行なう必要がある。

房総半島南部館山付近の地理学的考察

——沖積世の地盤隆起に伴う地形形成を中心に——

花 田 真 知 子

房総半島南部に位置する館山平野は、北条地溝の一部をなしている。この平野は隆起による新しい時代のものである。以下、その形成過程をまとめる。

- 1) 館山南西方の沼段丘には珊瑚の化石がみられるが、これは6160±120 Y.B.Pのものである。
- 2) 縄文プロパーの古い遺跡は、いずれも山寄りの高いところにあり、海岸平野とは無関係に存在している。
- 3) したがって、海岸平野の形成は縄文時代よりも後である。
- 4) 房総半島先端部は、常時沈水傾向にあるが、地震の際には、大きな隆起運動を示す。
- 5) 平野には、海岸線に平行な5列の浜堤列が認められる。
- 6) この浜堤の第V列目は、すでに彌生時代には陸化していた。
- 7) 条里の遺構が認められることから、第Ⅲ列目まではすでに8cには陸化していた。
- 8) 天正年代の汀線は、Ⅱ列目の浜堤の西側にあったと推定される。
- 9) 1703年、元祿地震の際に、Ⅰ列目の浜堤が隆起したと考えられる。
- 10) 1923年、関東地震の際の隆起では、北条海岸の砂浜が広がった。
- 11) その後は、沈水傾向にあるとみられる。
- 12) 南部海岸には、数段の海岸段丘がみられる。
- 13) その最下位のものである岩礁は、1923年関東地震の際の隆起によるものであり、10)の砂浜と対比される。

茅ヶ崎市の近郊農業に関する地誌的研究

日比野 洋 子

茅ヶ崎市は戦前・戦後を通じて東京、横浜および湘南各都市のベッドタウンとしての住宅地化の結果として人口の集積を続け、東海道本線、国道一号線沿いには工場の進出をみてきた。

都市化の進行は一方で農業の後退を余儀なくさせる。耕地の減少は経営規模の縮小、耕作放棄地の出現、さらには農地転用をもたらす。農業以外の就業の機会が増大することにより第Ⅱ種兼業農家の増加、後継者難、労働力の質の低下をひきおこす。地域的には特に市街地周辺にこの傾向が強いようである。

これらの現象が都市化が農業の発展に対してマイナスの面に働いていると考えられるのに対し、都市の近郊にあることを積極的に利用し、近郊農業として生きぬくため商品生産的農業を行なう農家も存在する。カーネーション・バラを中心とする温室栽培、トマト・きゅうりの果菜を作るビニールハウス、各種蔬菜の露地栽培、そして養鶏・養豚・酪農といった畜産を営む経営がそれである。